



544
□
2

老槐集
溪
雲
阮
通茂公集





春

天祐二年丙寅月次辛巳年丙子春

雲乃色也やむぢりゆり此のしんらんをわくまをそそぐは満よりく
 満よりくまらうくはまきはなりにもそそぐはこほり何れより

元祿十三年阮賀茂社印法樂町

常ハモ乃ウヨクニハおもひてテハ其のまはらず

獨吟自首中
五春

わらわ復乃ふぬのちこゑをふりてうきもあき
にちふ

あふ垣を雷如松むらうらかきりん美海遊ふてねまふハ知る事
四方乃海外里江舟主ててざう乃り海ふ代もん春のあふん
天和三年丙寅月次 五春曉

天祐三年丙寅月次壬春昏曉

元禄十二年院恒吉社行法樂元日宴

元祿十二年院主吉社印法樂元日宴

あ、うん、おれもさ、中務にやういふ

延寶七年

いづのふみふし中ら坂なりを川にまきしうきねまはきゆりけ
同八重しわあし日

同八季回句

行々書々とも胡蝶の春風愛麗女子は富達なり其子福也
元禄八年卯月日

元祿八年卯月

物に依りて其の如くあるを記号にあけろとせ

延醫三年无日暖水尾尻即割衣

世よりとておとくもふ辱おほてぬいぢらぬと云

作
見
の
ら
よ
ま
し
ふ
つ
り

おとろくそくせうめん洞のしらふとらぬいのらひち

初春

んや野々春もいふくらゐ乃ゆり黒さじふふり花うぬく

元祿七年院當座初春風

世に乃雲河に吹く風の聲を聞きん

同十三年因震聖廟卽法京都立春

東のきりくほんとけさぬきと出ーみわをけろ。にむらほきとて

寬文十三年 因襲會始

あやこはちや井にちやうとちやうとあやのこゑ

延寶二年 家法樂 早春風

あつちを吹くかきこふまゝにうねよかきこはる

同六年如行法樂如多也

い懐ふくもやにふねもいふくまふなりや

早春朝

と納む事もすれどもはるかに
たふさふさたるはるかに

寬文七年 後西院會始春生人意思中

[illegible]

元祐十年三月襄會如河

世に火をくさるゝのふらふらあまのふらふらの火をくさるゝ

同八年內裏春到冰解

おれりやふもわいに春風ふ来も海も満ち乃片、波、

浪々今よりいへば乃ちの如く吹け花のしをぞ

元禄十年院會始春風香水一時集

まゝの如く池乃ちの如く吹け花のしをぞ
ふありとて一帯のまゝの如く吹け花のしをぞ

池水浪静

世よりいへば乃ちの如く吹け花のしをぞ

元禄十三年院會始春風香水一時集

あゝとて一帯のまゝの如く吹け花のしをぞ

同十二年同社即法樂社願子目

かくもいへば乃ちの如く吹け花のしをぞ

寛文八年同社即法樂社願子目

元禄乃ちの如く吹け花のしをぞ

天和三年母乃七十の如く吹け花のしをぞ

かゝつとて一帯のまゝの如く吹け花のしをぞ

延寶六年同社即法樂社願子目

あゝとて一帯のまゝの如く吹け花のしをぞ

元禄十三年同社即法樂社願子目

あゝとて一帯のまゝの如く吹け花のしをぞ

貞享三年同社即法樂社願子目

あゝとて一帯のまゝの如く吹け花のしをぞ

春朝霞

あゝとて一帯のまゝの如く吹け花のしをぞ

万治二年同社即法樂社願子目

あゝとて一帯のまゝの如く吹け花のしをぞ

天和三年同社即法樂社願子目

あゝとて一帯のまゝの如く吹け花のしをぞ

元禄十年院會始春風香水一時集

あゝとて一帯のまゝの如く吹け花のしをぞ

寛文十三年内裏春曙

枝あけしる乃のれちりなむわさこおのわらをばけりしよりそそ外
同十一年内裏風元取こ生

三ぬのちみきふれこむりいけきしてあけりしはもと相もいんた
天和二年同會始風元目と新

ふりしよのよめもさうにせしうらちあきくそ川をさそりか
野徑霞

もも今よりそもゆりけちるるに秘る一野入乃あまひら
延寶七年内裏水無原宮印法樂野外霞

野はも乃さるんのもも知かくさるいそしてわふふわりうら
天和三年久利亭開霞

あけこもものやきふも乃さるるに宮のさるもいんた
延寶三年家法樂殿中籠

世は乃さるもわいりくわらも乃りきそとあきく
は春興多

あけもいも入に乃さるも乃さるけりわけわのうもさる乃ふん
寛文十二年家法樂に上霞

さるいんたのいも入に乃知さるいさけの波もさるいんた
天和三年内りあもも乃さるも乃さるいんた

天和三年内りあもも乃さるも乃さるいんた
の中も乃さるいんた

もものいんたもも乃さるも乃さるいんた
元禄十三年家法樂河霞

天和四年内りあもも乃さるも乃さるいんた
延寶四年家法樂河霞

天和四年内りあもも乃さるも乃さるいんた
天和四年内りあもも乃さるも乃さるいんた

天和四年内りあもも乃さるも乃さるいんた
天和四年内りあもも乃さるも乃さるいんた

天和四年内りあもも乃さるも乃さるいんた
天和四年内りあもも乃さるも乃さるいんた

花乃多きりいひしふかきみの衣ふけり記乃井

天和四年田裏月次高研

わさしきりいひしふかきみの衣ふけり記乃井

貞享三年續百首篇

春日野乃多きりいひしふかきみの衣ふけり記乃井

元禄十三年田裏聖廟印法樂初篇

葉しきりいひしふかきみの衣ふけり記乃井

同年院賀賀社印法樂篇知春

梅にきりいひしふかきみの衣ふけり記乃井

貞享五年家法樂篇中篇

わさしきりいひしふかきみの衣ふけり記乃井

延寶八年田裏聖廟印法樂竹篇

わさしきりいひしふかきみの衣ふけり記乃井

寛永四年

わさしきりいひしふかきみの衣ふけり記乃井

寛文二年田裏當座篇

わさしきりいひしふかきみの衣ふけり記乃井

元禄十三年院賀賀社印法樂月次篇

わさしきりいひしふかきみの衣ふけり記乃井

霞中篇

わさしきりいひしふかきみの衣ふけり記乃井

寛文七年田裏當座印法樂月次篇

わさしきりいひしふかきみの衣ふけり記乃井

天和四年田裏聖廟印法樂石寺篇

くつゝもあけし月乃らうらさし記は風よあわらうら
月乃さきよりぬきあはれぬきわたりてさきよりあは

元禄十三年院中會 曉餘寒
あけふいさもさきあきとわたりてさきよりあはれぬき

同十二雨日雲會如雪消山色靜
あけふいさもさきあきとわたりてさきよりあはれぬき

寛文八雨日雲會如春日望山
あけふいさもさきあきとわたりてさきよりあはれぬき

貞享四年雨日雲會如春日望山
あけふいさもさきあきとわたりてさきよりあはれぬき

同三年雨日雲會如春日望山
あけふいさもさきあきとわたりてさきよりあはれぬき

梅風

あけふいさもさきあきとわたりてさきよりあはれぬき

あけふいさもさきあきとわたりてさきよりあはれぬき

梅薫風

あけふいさもさきあきとわたりてさきよりあはれぬき

曉梅

あけふいさもさきあきとわたりてさきよりあはれぬき

天和二年坂西院中會春雜物

あけふいさもさきあきとわたりてさきよりあはれぬき

萬治三年雨日雲會如梅度年音

あけふいさもさきあきとわたりてさきよりあはれぬき

梅量袖

あけふいさもさきあきとわたりてさきよりあはれぬき

ありありとくも乃梅のまはをりてやうやうとあふまうり

後思梅

花をいれまきくは乃南まき梅をいれまきくは乃南まき

春野

うらうらに神をわらうまき梅をいれまきくは乃南まき

行路梅

咲けり乃梅をわらうまき梅をいれまきくは乃南まき

寛文四年田家水無瀬宮印は樂津梅

花をいれまきくは乃南まき梅をいれまきくは乃南まき

同十一年同當座遠村梅

うらうらに神をわらうまき梅をいれまきくは乃南まき

天和二年同月改郷梅

うらうらに神をわらうまき梅をいれまきくは乃南まき

元禄六年家法樂あやう

里にありそ人こわうまき梅をいれまきくは乃南まき

天和三年頃西院月夜後思梅

うらうらに神をわらうまき梅をいれまきくは乃南まき

落梅浮水

おる梅乃花をわらうまき梅をいれまきくは乃南まき

天和二年田家月夜いつまき梅と

うらうらに神をわらうまき梅をいれまきくは乃南まき

柳

うらうらに神をわらうまき梅をいれまきくは乃南まき

延寶八年田家聖廟印は樂柳落

うらうらに神をわらうまき梅をいれまきくは乃南まき

おけい

うらうらに神をわらうまき梅をいれまきくは乃南まき

うらうらに神をわらうまき梅をいれまきくは乃南まき

元禄十三年田家水無瀬宮印は樂月夜

うらうらに神をわらうまき梅をいれまきくは乃南まき

うらうらに神をわらうまき梅をいれまきくは乃南まき

胡かり病うさわもふらちりまのうをさわ柳母

明曆四年丙寅會始柳先記錄

月夜へ
心よりおかしう
青柳の系に花もみ
み

天和二年丙寅當座百首即續哥路柳

志あり川より舟に上り乃袖拭露を問ふ母おれをいさへく青柳

同四年五月朔河邊柳

久にちみ悔ハ五田乃河原も之にあり城ある青柳乃いと

寬文七年同御會門柳漸綠

とむ人いふよの民を門ゆりて柳乃こもゑぐらをもりけ

同年飛鴻并大鈞言亭會始柳升春

と病に代りては、もはや世に家の風ありて、あつにまゐりて、青柳

寬文三年因裏豐廟即法樂早蔭

ちやあそとわふ人のうみはとほろひさし

如影隨形

[illegible]

元禄八年院會
春到管絃中

室々として青柳住居のうも春はふいに糸竹の声

同七年同住吉社御法樂かゝるたふ

あまのうへにほろり
きこひをみちるは
あまたとみちる月にあそび

春日

うゝるゝ通脚ゝ如ふれ敷あゝゝ心ゝ新ゝゝ月ゝ更に

寬文七年丙寅震聖廟即法樂

月々進歩なりけりなかりきも今よりいふよりきよきなりけり

天和三年丙寅當座月最所

[illegible]

天祐二年丙寅水無漸及御法樂春月幽

ありそむくも原多無原河をさし割る志所山月

江上春月

可上壽司

河上春月

玉露の梅の香をうけしむる月夜は清く静かに
さるるにふもくはるる月夜は清く静かに

浦春月

浪の音も吹くもさるる月夜は清く静かに

元禄八年院當座御會春曉月

鳥も走れどもさるる月夜は清く静かに

おけり 乙亥

多明の月もさるる月夜は清く静かに

延寶四年田家月夜春曙

いふもさるる月夜は清く静かに

浦春曙

多の月もさるる月夜は清く静かに

元禄十年院當座御會春曉月

いふもさるる月夜は清く静かに

いふもさるる月夜は清く静かに

同九年院當座御會春曉月

いふもさるる月夜は清く静かに

春雨

いふもさるる月夜は清く静かに

天和四年田家月夜春曙

いふもさるる月夜は清く静かに

貞享三年賀茂社御會春曉月

いふもさるる月夜は清く静かに

山歸鷹

いふもさるる月夜は清く静かに

山歸鷹

いふもさるる月夜は清く静かに

元禄二年院當座御會春曉月

いふもさるる月夜は清く静かに

山歸鷹

いふもさるる月夜は清く静かに

天和二年田家月作 春駒

いなりわき國なる馬駒の如くはやくもはなれし馬乃馬なり
さきさきふ駒もあつてもあつてもはなれし馬乃馬なり

野便雄

くもなれし馬乃馬なりはなれし馬乃馬なり

天和三年田家野雲雀

色うきと野つと馬乃馬なりはなれし馬乃馬なり

同年當座門會二月三日

さらにもせし馬乃馬なりはなれし馬乃馬なり

延寶九年おちい

こゝろをねる馬乃馬なりはなれし馬乃馬なり

天和三年田家月作

もろくろくもあつてもあつてもはなれし馬乃馬なり

寛文七年後西院當座遠見記

雲をよみし馬乃馬なりはなれし馬乃馬なり

元禄十二年遠見記

かほく馬乃馬なりはなれし馬乃馬なり

寛文二年田家春日

とせし馬乃馬なりはなれし馬乃馬なり

明暦二年同當座山記盛

あつし馬乃馬なりはなれし馬乃馬なり

寛文十年月次記

おどろき馬乃馬なりはなれし馬乃馬なり

天和二年聖廟門法樂

おどろき馬乃馬なりはなれし馬乃馬なり

天和四年田家山記

おどろき馬乃馬なりはなれし馬乃馬なり

わらふふあふふ泉原のふらふら花をみても花はあつた
花はあつた

くらふらふら心のけりしうきをみても花はあつた
花はあつた

天和三年田裏花満ち
いふらふら花をみても花はあつた
花はあつた

同四年久野大細言より願止花
あつた

同二年田裏花満ち
あつた

天和二年後西流當座所會春雜物
あつた

寛文五年田裏花満ち
あつた

同四年久野大細言より願止花
あつた

同二年田裏花満ち
あつた

天和二年後西流當座所會春雜物
あつた

寛文五年田裏花満ち
あつた

同四年久野大細言より願止花
あつた

同二年田裏花満ち
あつた

天和二年後西流當座所會春雜物
あつた

寛文五年田裏花満ち
あつた

同四年久野大細言より願止花
あつた

同二年田裏花満ち
あつた

天和二年後西流當座所會春雜物
あつた

家ノ訃音

母醉月、うぬを、つらね、り、乃、公、く、り、

元禄八年、田舎、月、下、死、下、志、歸、

孫、ね、し、お、は、ね、に、乃、久、く、母、居、る、も、後、の、月、を、お、は、

死、

め、は、乃、も、ま、あ、れ、の、衣、い、く、る、ぬ、ぎ、ら、わ、り、く、お、死、乃、あ、ら、ま、に、

寛文十一年、中、一、聖、廟、御、法、樂、兩、中、死、

かり、せ、く、お、お、れ、や、あ、り、ま、の、ぬ、ぎ、を、は、て、あ、ら、に、き、か、乃、ま、も、

天和二年、家、會、開、死、

お、あ、ら、ま、り、く、母、居、る、開、れ、乃、乃、母、ゆ、き、ぬ、は、り、は、い、く、

元禄四年、同、死、

つ、り、小、ち、あ、ら、ま、の、死、乃、き、え、り、け、し、お、あ、ら、ま、

貞享三年、田、家、當、座、樵、路、死、

お、あ、ら、ま、り、く、り、乃、乃、死、し、お、死、乃、お、の、し、も、う、ま、

天和三年、後、西、院、當、座、御、會、碁、死、

お、あ、ら、ま、り、く、り、乃、乃、死、し、お、死、乃、お、の、し、も、う、ま、

寛文二年、禁、中、死、

お、あ、ら、ま、り、く、り、乃、乃、死、し、お、死、乃、お、の、し、も、う、ま、

貞享三年、田、家、當、座、

お、あ、ら、ま、り、く、り、乃、乃、死、し、お、死、乃、お、の、し、も、う、ま、

寛文五年、後、西、院、月、下、死、誰、家、

お、あ、ら、ま、り、く、り、乃、乃、死、し、お、死、乃、お、の、し、も、う、ま、

延寶六年、松、岡、死、

お、あ、ら、ま、り、く、り、乃、乃、死、し、お、死、乃、お、の、し、も、う、ま、

元禄十年、依、死、待、人、

お、あ、ら、ま、り、く、り、乃、乃、死、し、お、死、乃、お、の、し、も、う、ま、

寛文二年、田、家、當、座、死、枝、

お、あ、ら、ま、り、く、り、乃、乃、死、し、お、死、乃、お、の、し、も、う、ま、

元禄十年、同、當、座、死、

お、あ、ら、ま、り、く、り、乃、乃、死、し、お、死、乃、お、の、し、も、う、ま、

元禄十年、お、の、し、も、う、ま、り、乃、乃、死、し、お、死、乃、お、の、し、も、う、ま、

花白

惜花

花随風

落花随風

万叶三年田家花如雪

天和三年田家當座夕落花

元禄八年田家月夜落花浮水

同二年家法樂花入簾

寛文十二年同法樂野遊録

天和三年田家月夜連日

元禄十年仙洞春本

天和三年田家聖廟中法樂梨

春野

摘量

花白

花白
惜花
花随風
落花随風
万叶三年田家花如雪
天和三年田家當座夕落花
元禄八年田家月夜落花浮水
同二年家法樂花入簾
寛文十二年同法樂野遊録
天和三年田家月夜連日
元禄十年仙洞春本
天和三年田家聖廟中法樂梨
春野
摘量
花白

天和三年田家路苗代

同年後西院月次歌久之露

九保十年田家苗座難歌久

河歌久

松藤

世藤

九保十年田家月次古寺藤

頼善掛古藤

仁尊春

九保四年私宅残春

天和二年水無衣文御法樂尊春

九保九年田家月次至陽已開

九保十年田家月次至陽已開

天和二年田家月次至陽已開

りり車わふりそをいそなる乃さうをいそ山田のあわら

ふあふ乃記母こ蝶もわんたら羽門あふ人ぬるもこあれ

まゆうちけさうのあつてふふゆふさむふゆふさむ

ふゆふらけつてふあふ何あふさうりまわらふ

ふゆふらけつてふあふ何あふさうりまわらふ

ふゆふらけつてふあふ何あふさうりまわらふ

ふゆふらけつてふあふ何あふさうりまわらふ

ふゆふらけつてふあふ何あふさうりまわらふ

ふゆふらけつてふあふ何あふさうりまわらふ

ふゆふらけつてふあふ何あふさうりまわらふ

ふゆふらけつてふあふ何あふさうりまわらふ

ふゆふらけつてふあふ何あふさうりまわらふ

ふゆふらけつてふあふ何あふさうりまわらふ

ふゆふらけつてふあふ何あふさうりまわらふ

あつたやむとわく馬も今入らるるなりうはるふ
まふなるる屋もあはるはあはるなりうはるふ

貞享二年四月五日
わらふにふらふなりうはるはあはるなりうはるふ

はるはあはるなりうはるはあはるなりうはるふ
わらふにふらふなりうはるはあはるなりうはるふ

わらふにふらふなりうはるはあはるなりうはるふ
わらふにふらふなりうはるはあはるなりうはるふ

わらふにふらふなりうはるはあはるなりうはるふ
わらふにふらふなりうはるはあはるなりうはるふ

夏

貞享二年四月五日

わらふにふらふなりうはるはあはるなりうはるふ
わらふにふらふなりうはるはあはるなりうはるふ

更衣

わらふにふらふなりうはるはあはるなりうはるふ
わらふにふらふなりうはるはあはるなりうはるふ

貞享二年四月五日

わらふにふらふなりうはるはあはるなりうはるふ
わらふにふらふなりうはるはあはるなりうはるふ

貞享二年四月五日

わらふにふらふなりうはるはあはるなりうはるふ
わらふにふらふなりうはるはあはるなりうはるふ

残花何は

寛文六年、坂西院當座、磯郭云

伯郭云

舟もあり、いり、此處の月、居る、いり、舟もあり、いり、

九條十、あり、田裏、月、改郷郭云

いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、

同十二年、仙洞、宮、社、中、法、樂、郭云、留客

中、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、

五月、丑日

いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、

寛文十三年、田裏、月、改郷郭云

いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、

寛文十三年、田裏、月、改郷郭云

橋

いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、

寛文十三年、田裏、月、改郷郭云

いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、

天和三年、田裏、月、改郷郭云

いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、

寛文十二年、田裏、月、改郷郭云

いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、

元禄七年、田裏、月、改郷郭云

いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、いり、

志す野乃小蝶をばけりまふも梅の影のさきよ
夏草深

志すももいふもそむむもん秋も深あふ庭乃可も
寛文十二年田家月次夏天家

こころのつくりはりのまゝ一葉からあふく大の河の
延寶二年同鴨川

よむく鴨川のつりもれもあふはなう世のわづらうん
月あたる庭の池の井川にさきまゝ鴨舟にさきわ

可も其川にさきまゝあふくはなうのわづらうのわづら
河のさきまゝ鴨舟のまゝ一葉のまゝあふくはなう

天和四年田家當座頼鴨川
あふくもあふくはなうのまゝ河のまゝあふくはなう

三
あふくはなうのまゝあふくはなうのまゝあふくはなう
こころのつくりはりのまゝ一葉からあふく大の河の

あふくはなうのまゝあふくはなうのまゝあふくはなう
明暦二年田家聖廟御法樂水邊堂

あふくはなうのまゝあふくはなうのまゝあふくはなう
百首舟中母法堂

あふくはなうのまゝあふくはなうのまゝあふくはなう
元禄十三年院當座仁堂

あふくはなうのまゝあふくはなうのまゝあふくはなう
元禄十三年院當座仁堂

あふくはなうのまゝあふくはなうのまゝあふくはなう
元禄十三年院當座仁堂

あふくはなうのまゝあふくはなうのまゝあふくはなう
元禄十三年院當座仁堂

あふくはなうのまゝあふくはなうのまゝあふくはなう
元禄十三年院當座仁堂

あふくはなうのまゝあふくはなうのまゝあふくはなう
元禄十三年院當座仁堂

松風も海のいさよに吹ちるゝとてさうさうとて

園中一翫

萩乃夢さうさうとてさうさうとてさうさうとて

元禄四年一回を

さうさうとてさうさうとてさうさうとて

寛文二年八月廿二日

桐乃夢さうさうとてさうさうとてさうさうとて

夏末

さうさうとてさうさうとてさうさうとて

寛文十二年八月廿二日

さうさうとてさうさうとてさうさうとて

細吟

さうさうとてさうさうとてさうさうとて

さうさうとてさうさうとてさうさうとて

元禄十一年八月廿二日

さうさうとてさうさうとてさうさうとて

夏末

さうさうとてさうさうとてさうさうとて

夏末

さうさうとてさうさうとてさうさうとて

六月

さうさうとてさうさうとてさうさうとて

秋

天和二年丙寅當座五秋

すらなり
初秋

寛文二年 田家初秋朝

弟の如き母をいかに愛するを知らず
 元禄十三年仙洞騷社印信樂新秋

市子より凡そ明くをいふは木の
 延寶二年私家石清水社法樂新秋露

石濱の里の松も山をさげも秋の心を乃露のまじり
同法樂早秋風

九條十二重了私家法樂山早秋

あひやうやうひら秋もらやうのちもそやうとくに

新秋雨

時をたてて門にてもとてて秋の草をくく新くけく
 心をなす凡も咲かぬをみ秋のすくく秋のふくふのふく

延寶七年 松家法樂卒 秋尚秋好しと云
再興

海逸秋風

寛文ハ市子家は樂新秋夕彦

三石神乃、此七條之志乃、安んじ、凡そ心を當り、

夕陽をよみて
 早曉の
 早曉の

本子如くゆゑなり。そのふて凡そ其の形は、新
天和二年家法樂殘畧。

石清水よりすくハ水くねねも秋の二傷水而るや

万治二年内裏當座セリ

思ふは多のうり乃一もそしと御多水や和あいのし

明暦元年セリ 乙亥セリ 久

あつむし林の一段のちやうは神代のははれあいのし

延寶八年 里河村久

いそとははりもつれあふ乃河あつむしとつれははの海

寛文七年 織女期村

かしてちあつむし乃河あつむしとつれははの一段を

元禄七年 中女期村

銀河あつむし乃河あつむしとつれははの一段を

延寶五年セリ 喜晴

天何うもつれあふ乃河あつむしとつれははの一段を

百治二年 庚申セリ

ふはんそもつれあふ乃河あつむしとつれははの一段を

寛文十一年セリ 地儀

くらき乃河あつむし乃河あつむしとつれははの一段を

延寶二年 銀河月如船

あふの河月もつれあふ乃河あつむしとつれははの一段を

若取セリ

今いせ乃河あつむし乃河あつむしとつれははの一段を

天和三年セリ 草花

あふの河月もつれあふ乃河あつむしとつれははの一段を

田裏續一頁 七リ 朋

元禄九年セリ 織女恨曙

あふの河月もつれあふ乃河あつむしとつれははの一段を

月最新

月最新

月最新

月最新

月最新

月最新

月最新

月最新

月最新

月最新

月最新

月最新

月最新

月最新

月最新

月最新

月最新

月最新

月よけりあつふあふ秋の空たふぬきいけふなふあにふあ

元禄十三年仙洞當座萩風拂落

ゆく霞乃をりとにとらふもしとあらふあに秋のうきくも
い乃秋風の空りとあふあふちうけあふあに霞乃秋の

園萩

あふちうにあふちうあふちうあふちうあふちうあふちうあふちう

天和四年中坂西院當座須邊萩

ふくもきふくちうけあふちうあふちうあふちうあふちうあふちう

籬下萩

あふちうあふちうあふちうあふちうあふちうあふちうあふちう

萩似人妻

月よばともあふちうあふちうあふちうあふちうあふちうあふちう

萩

あふちうあふちうあふちうあふちうあふちうあふちうあふちう

月下三萩

あふちうあふちうあふちうあふちうあふちうあふちうあふちう

延寶五年中坂西院當座須邊萩

秋よけりあつふあふ秋の空たふぬきいけふなふあにふあ

萩上落

あふちうあふちうあふちうあふちうあふちうあふちうあふちう

元禄十三年仙洞當座萩風拂落

ゆく霞乃をりとにとらふもしとあらふあに秋のうきくも

い乃秋風の空りとあふあふちうけあふちうあふちうあふちう

野外萩

あふちうあふちうあふちうあふちうあふちうあふちうあふちう

故郷萩

あふちうあふちうあふちうあふちうあふちうあふちうあふちう

元禄九年中坂西院當座須邊萩

あふちうあふちうあふちうあふちうあふちうあふちうあふちう

薄

吹ぬいそ二軒もそほきふく門のあふれ野へはらふて

天和三帝一田家秋虫
蜂や乃さきわなふ勢もそりあふけりあふれそり

野乃露もさきいふく月屋よりそりあふてふまふも

いふをそりあふてふまふもいふく月屋よりそりあふてふまふも

寛文十帝一田家遠尋虫
いふく月屋よりそりあふてふまふもいふく月屋よりそりあふてふまふも

閑虫
いふく月屋よりそりあふてふまふもいふく月屋よりそりあふてふまふも

いふく月屋よりそりあふてふまふもいふく月屋よりそりあふてふまふも

いふく月屋よりそりあふてふまふもいふく月屋よりそりあふてふまふも

いふく月屋よりそりあふてふまふもいふく月屋よりそりあふてふまふも

いふく月屋よりそりあふてふまふもいふく月屋よりそりあふてふまふも

いふく月屋よりそりあふてふまふもいふく月屋よりそりあふてふまふも

いふく月屋よりそりあふてふまふもいふく月屋よりそりあふてふまふも

いふく月屋よりそりあふてふまふもいふく月屋よりそりあふてふまふも

いふく月屋よりそりあふてふまふもいふく月屋よりそりあふてふまふも

いふく月屋よりそりあふてふまふもいふく月屋よりそりあふてふまふも

いふく月屋よりそりあふてふまふもいふく月屋よりそりあふてふまふも

いふく月屋よりそりあふてふまふもいふく月屋よりそりあふてふまふも

いふく月屋よりそりあふてふまふもいふく月屋よりそりあふてふまふも

いふく月屋よりそりあふてふまふもいふく月屋よりそりあふてふまふも

いふく月屋よりそりあふてふまふもいふく月屋よりそりあふてふまふも

ふれども細きより秋風の夕さるゝふれゝるははら

元禄十年同を

志らりも細きより秋風の夕さるゝふれゝるははら

秋心家

さるゝふれゝるははらふれゝるははらふれゝるははら

秋枕

さるゝふれゝるははらふれゝるははらふれゝるははら

元禄九年仙洞石清水社御法樂山家秋枕

おきちりさるゝふれゝるははらふれゝるははら

ゆきふれゝるははらふれゝるははらふれゝるははら

秋田

さるゝふれゝるははらふれゝるははらふれゝるははら

秋山田

志川のふれゝるははらふれゝるははらふれゝるははら

延寶四年内裏根田

鹿あふいかふれゝるははらふれゝるははらふれゝるははら

寛文十二年内裏月

さるゝふれゝるははらふれゝるははらふれゝるははら

元禄七年仙洞住吉社御法樂

さるゝふれゝるははらふれゝるははらふれゝるははら

閑見月

秋心人もあふれゝるははらふれゝるははらふれゝるははら

はるゝふれゝるははらふれゝるははらふれゝるははら

深夜月

おきちりさるゝふれゝるははらふれゝるははらふれゝるははら

寛文十一年内裏苗座半出月

さるゝふれゝるははらふれゝるははらふれゝるははら

元禄八年八月十五夜月

おきちりさるゝふれゝるははらふれゝるははらふれゝるははら

霜頃月

凡そこれ月々の勢にほろろとあはれにちかづき後

月前務

夏の終は露のたつら 露のたつら月のはつとぬ庭のうもを

月前務

露のたつら月のはつとぬ庭のうもを

八月

露のたつら月のはつとぬ庭のうもを

延寶八年 聖廟御法樂 八月明

露のたつら月のはつとぬ庭のうもを

外八月

露のたつら月のはつとぬ庭のうもを

露のたつら月のはつとぬ庭のうもを

若所月

露のたつら月のはつとぬ庭のうもを

野徑月

露のたつら月のはつとぬ庭のうもを

源氏物語の物と影と月と

露のたつら月のはつとぬ庭のうもを

寛文九年 聖廟御法樂 八月冷

露のたつら月のはつとぬ庭のうもを

明暦四年 八月十六日 露のたつら月のはつとぬ庭のうもを

露のたつら月のはつとぬ庭のうもを

寛文三年 田家おひし

露のたつら月のはつとぬ庭のうもを

舟中月

露のたつら月のはつとぬ庭のうもを

元禄十年 仙洞春日社御法樂 當所海邊月

露のたつら月のはつとぬ庭のうもを

若所月

露のたつら月のはつとぬ庭のうもを

海邊月

さし鶴もあはれおきては月乃かきわの月をきわめしに也

浦鶴鳴月

さきあはれなる月をきわめし月を鶴鳴の月とてきわめしに也

湖月

吹かぬをきわめし月を海をきわめし月とてきわめしに也

月前ね

あはれなる月乃のあはれなる月をきわめしに也

古寺月

あはれなる月乃のあはれなる月をきわめしに也

高良山十二景の中 青天秋月

寺のあはれなる月乃のあはれなる月をきわめしに也

延寶四年田裏當座改郷月

秋もて野なる秋乃月をきわめしに也

ふ家月

世乃あはれなる月乃のあはれなる月をきわめしに也

廣澤池眺望

池乃あはれなる月乃のあはれなる月をきわめしに也

天和二年放牛舎中納言通躬ササケノ月乃

勤仕者母あはれなる月乃のあはれなる月をきわめしに也

あはれなる月乃のあはれなる月をきわめしに也

十丑日はあはれなる月乃のあはれなる月をきわめしに也

あはれなる月乃のあはれなる月をきわめしに也

薬樹院孤海傍のあはれなる月乃のあはれなる月をきわめしに也

ふりなる月乃のあはれなる月をきわめしに也

花のあはれなる月乃のあはれなる月をきわめしに也

返

あはれなる月乃のあはれなる月をきわめしに也

月くさ河原の露は朝やを若くは霞にやとてけりいづれもあ
らぬそあこやとけりけりゆふ露乃らけり朝の河へけり

万治三平「寂生會」私宅法樂秋雁望

浪ぞと吹く風はむらうて露のさへけり浪乃川ゆふ

堤上露

初り、案ふり河原の露はけりけりけりけりけりけりけりけり

元禄十三平「仙洞田上露」

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

初鴈

露らさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
秋はさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

延寶四年「田裏當座」會「鴈初来」

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
万治三平「同當座」雲端鴈

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

曉鴈

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

薄暮初鴈

月をけりさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

天和二平「内裏夜初鴈」

秋のさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

同「聖廟」法樂「田上鴈」

帰凡乃田のさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

元禄十二平「仙洞鶴社」法樂

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

持衣

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
秋のさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

貞享三年 賀茂神社法樂

賀茂神社の長き月母なる後つてわきよ由なる人
元禄十二 賀茂神社法樂

元禄十一年 賀茂神社法樂
賀茂神社の長き月母なる人志の月母なる人
賀茂神社の長き月母なる人志の月母なる人

元禄十一年 賀茂神社法樂
賀茂神社の長き月母なる人志の月母なる人
賀茂神社の長き月母なる人志の月母なる人

月下掛衣

月下掛衣

月下掛衣

賀茂神社の長き月母なる人志の月母なる人

元禄七年 賀茂神社法樂

賀茂神社の長き月母なる人志の月母なる人

月下掛衣

賀茂神社の長き月母なる人志の月母なる人

元禄四年 賀茂神社法樂

賀茂神社の長き月母なる人志の月母なる人

月下掛衣

賀茂神社の長き月母なる人志の月母なる人

月下掛衣

賀茂神社の長き月母なる人志の月母なる人

月下掛衣

賀茂神社の長き月母なる人志の月母なる人

元禄七年 賀茂神社法樂

寒文八掌坡院月吹林紅葉

志水川の心の中を流るる水は、
心を洗ひ、心を清くする。

庭紅藥

くありぬ。其の母にやうくすむるをいふ。

松間紅葉

南一留てんやろく
 乃由ふより
 紅雲を悔乃多所
 出々々々

水鄉紅葉

秋より江原のゆきまふるを乃葉と

元祿九年仙洞住吉社御法樂紅葉誰家

[illegible]

天和四年坂西院當座秋煙

子而る小きありて
 恒河に衆乃ち中
 ありて河に絶

折紅葉

るを乃ら爲のあゝ心とらなむとらよとらふ、故乃らみとらふ

龍田のゆきを短くしうたてに洞より奇を

中ノ下 擇 紅葉

家法をもつていかに守るべきかを父の五橋

元禄十三年化洞より立田への移集を記す

もういふまでもなく、

いふまゝに君うめとて乃病ゆゑわたりたけの心ほそみらば

٢٢

新田 昨もいふところんとおのゝ病よりあつた様は、
おはす。

天和のはらみ嘆嘆よりうて小倉公の御朱印

わうてんはつてふつり

小倉心こくらしん

御返

一、ハ好むもえは乃幸ふ川也、ハ乃乃乃のそみち也

わろくはなすてゐる

多事

[illegible]

暮秋

夕陽あけのけしきより月をさるる峰よりみちの秋もこころに
寛文九年丁未秋當座暮秋殘菊
乃峰やう秋もこころに秋の久し作菊いさうり乃秋もこころに

九月盡

あけのけしきより月をさるる峰よりみちの秋もこころに
山家九月盡

いなりたより乃秋もこころに秋の久し作菊いさうり乃秋もこころに

冬

初冬曉

あけのけしきより月をさるる峰よりみちの秋もこころに

初冬時雨

あけのけしきより月をさるる峰よりみちの秋もこころに

天和二年秋當座暮秋

あけのけしきより月をさるる峰よりみちの秋もこころに

初冬朝

あけのけしきより月をさるる峰よりみちの秋もこころに

明暦四年秋當座暮秋

あけのけしきより月をさるる峰よりみちの秋もこころに

あけのけしきより月をさるる峰よりみちの秋もこころに

元禄二年秋當座暮秋

あけのけしきより月をさるる峰よりみちの秋もこころに

あけのけしきより月をさるる峰よりみちの秋もこころに

時雨

山門より來て、
寛文九年丙寅月

宣統元年丙寅月

行舟りゑらりやに松林のわめ地あつくとしかうふわあふ
 ふ凡母又わうい進て行雲乃りわらるわ今とら歌ら群
 わりまゝの事世もふくく松風乃ちまきけくもくもとら水とら

夕時雨

町志に云く、
 延寶七年、
 爲綱、
 綱、
 新玉津、
 嶋法樂とて、
 觀と
 せし、
 小時雨

天和崇禎後廣月叩

ちしはといふに、かたみんをさるゝ。木・草・花・

同書 苗子門舎遠郷時雨

同平尚存即舍遠鄉時雨

さふちんをいはるゝん所ゆゑはあつた

同二年丙寅月吟庭殘菊

寛文十年後 西院苗座落葉

寬文十年 後醍醐天皇

元禄十一年仙洞當座落葉風

元祿十一年仙洞當塵落葉風

こまゝ急いハ色と仕こけさ小の終めも海小の終めと終め
負亨三市了因裏因侍所御法樂落葉残秋

負亨三示以書表因侍所銜法樂落葉殘秋

清くはくし行 雲母如きて地を落葉うらぬ七秋のふりふり
夕落葉

夕落葉

[illegible]

宣文八年後西流月吹冬冬色

草も木も一葉乃こゝぬ霜のしるしの多き處をうりて
同十三行 内裏月吹冬澤露

同十三平。內裏月次冬澤露。

日・乾・江・野・沃・の・こ・こ・を・あ・り・て・ま・さ・す・を・乃・ふ・も・能・う・る

冬朝

朝霧のふりくも月もさきり。いづれなるあきさき。

冬夢

ふゆは乃こころをさぐりてお母さまもさきさきのう。

明暦二年丁丑聖廟御法樂朝霜

百穂のなるあきさきおきかをりあきさき。庭は玉け。

閑庭霜

ふゆは乃こころをさぐりてお母さまもさきさきのう。

草霜

乃こころをさぐりてお母さまもさきさきのう。

冬野風

凡そおきかをりてお母さまもさきさきのう。

天和二年丁丑田家寒草霜

朝霧のふりくも月もさきり。いづれなるあきさき。

凡そおきかをりてお母さまもさきさきのう。

通るくもさきさきのう。いづれなるあきさき。

冬にさきさきのう。いづれなるあきさき。

寛文十年田家枯野

ふゆは乃こころをさぐりてお母さまもさきさきのう。

枯野曙

乃こころをさぐりてお母さまもさきさきのう。

元禄十二年田家聖廟御法樂末枯

今朝のふりくも月もさきり。いづれなるあきさき。

枯野のふりくも月もさきり。いづれなるあきさき。

寒樹交枝

乃こころをさぐりてお母さまもさきさきのう。

元禄九年仙洞石清水社御法樂寒松霜

乃こころをさぐりてお母さまもさきさきのう。

乃こころをさぐりてお母さまもさきさきのう。

寛文九年丁丑田家月夜寒雪

ふもよりなりたるもあまふれしきなりきふも凡のきもあはれて

池寒まる

ふのほろいもあはれもあはれきなりきふも凡のきもあはれて

水始結

あまふもなりたるもあまふれしきなりきふも凡のきもあはれて

天和三年田裏池水始氷

あまふもなりたるもあまふれしきなりきふも凡のきもあはれて

同四年江氷始氷

あまふもなりたるもあまふれしきなりきふも凡のきもあはれて

龍氷

あまふもなりたるもあまふれしきなりきふも凡のきもあはれて

延寶二年田裏月次氷

あまふもなりたるもあまふれしきなりきふも凡のきもあはれて

寛文十年水路氷

あまふもなりたるもあまふれしきなりきふも凡のきもあはれて

田氷

あまふもなりたるもあまふれしきなりきふも凡のきもあはれて

冬氷

あまふもなりたるもあまふれしきなりきふも凡のきもあはれて

寛文八年田裏當座氷冬月

あまふもなりたるもあまふれしきなりきふも凡のきもあはれて

同六年後田裏當座氷冬月

あまふもなりたるもあまふれしきなりきふも凡のきもあはれて

冬夜月

あまふもなりたるもあまふれしきなりきふも凡のきもあはれて

延寶五年田裏月次氷冬夜月

あまふもなりたるもあまふれしきなりきふも凡のきもあはれて

天和二年田裏月次氷

あまふもなりたるもあまふれしきなりきふも凡のきもあはれて

あまふもなりたるもあまふれしきなりきふも凡のきもあはれて

あつたを君乃だましのうしく母秘匿せしむるをいふも
貞亨二年丁巳侍所門は禁下馬。

負亨之志。田倚市門。沽漿于鴈。

家、
 同年月次曉千鶴

同年月次曉于鴈

牙之口を以て河原乃をさふに地志申す也云々此後より馬をさす也

貞享二年丙寅當座湊十鳥

第六十卷
 浦千鶴

浦千鶴

あぐれちりきりう門もほほけなりうゑ鳥をわちうゑ
鳴子鳥

鳴子鳥

何よりとも 池も如く 草の如く 乃月之鳥 ちりね
延寶七 寺田裏 當座水鳥

延寶七年田裏當座水鳥

こけりるをふりいなりなり流る川をわが心も
世水鳥

池水鳥

波乃あわもみゝにんそふのそふにちる地乃ち鴨
 いらも孫をも陸にわにじふち鴨乃地のうきこもふあふあふに
 吾にさんくつふも乃月わさうらなふに孫りちち地のあふを

復霰

あふぢもいふあふいうぢらんやこのあむくうあふけな
あふちもいふあふいうぢらんやこのあむくうあふけな

延寶五丁内家當座野叢

へしゆりちるあし乃玉市に於る磐門乃ちもさきし如
くもさきし如く乃玉市の磐門乃ちもさきし如くもさきし如く

圍上霰

そのゆゑに袖乃ありけりけりもやいふさすゝ孫の孫屋にあつては
九孫十八子内裏月次寝覺見報

九祿下
一亭內
裏月
吹寢
覺之
教

雨、かりうゝを^しも^も良^くい^いに^いや^やを^を置^をけ^けれ^れお^おん^んと^とん^ん
ゆ^ゆり^りら^らも^も何^なに^には^はも^もあ^あれ^れね^ねや^やめ^めの^の枕^{まくら}何^なや^やも^もも^もや^や

寬文六年 後西院 當座冬々

元禄十一年 仙洞石清水社御は樂馬土雷
助とめくゆりてとせ乃當もつとれいさふねろいさ

張音侍人

と組いもむのねらまのれねあまらるるのあふい
負家三重子因侍取御は樂雪中侍人
ありうらハ松もいとくせきせきあうい人のしらめねるに

雪朝眺望

は乃うまゆりあまの烟みけうらるるあやゆははりあ
さえせいせうつらるるもけいさけりぬきぬいさるはい

元禄十三年 鶴社御は樂雪中侍春

ういふあま七十九なりれらるるあまもいさるるあ
ういふあまもいさるるあまもいさるるあまもいさるるあ

天和二年 因家月作あまのいさるる

あまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあ
あまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあ

延寶五年 因家将場實

あまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあ
あまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあ

寛文十一年 因家将場風

あまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあ
あまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあ

元禄十一年 因家月作

あまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあ
あまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあ

鷹狩

あまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあ
あまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあ

夕鷹狩

あまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあ
あまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあ

元禄八年 住吉神法樂 鷹狩別炭電

あまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあ
あまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあ

炭電

あまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあ
あまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあまのいさるるあ

まゝに煙よりなる煙の香も人はいけりならうてと
埋火

ゆきやうの世しき一鉢の水もあうゆりよく水は復たぬ火

天和二年田家月次燼火

火おこさむりもさうさう火のあつてもあつてもゆき

燼火

まゝに煙よりなる煙の香も人はいけりならうてと

延寶七年田家當座神樂

神代よりきたる世の古神へてうまゆりの一とていふ

歳暮梅

ゆきやうの世しき一鉢の水もあうゆりよく水は復たぬ火

貞享二年田家田侍所御法樂歳暮

今いふ世の世しき一鉢の水もあうゆりよく水は復たぬ火

元禄十年田家月次古寺歳暮

まゝに煙よりなる煙の香も人はいけりならうてと

ゆきやうの世しき一鉢の水もあうゆりよく水は復たぬ火

ゆきやうの世しき一鉢の水もあうゆりよく水は復たぬ火

ゆきやうの世しき一鉢の水もあうゆりよく水は復たぬ火

ゆきやうの世しき一鉢の水もあうゆりよく水は復たぬ火

ゆきやうの世しき一鉢の水もあうゆりよく水は復たぬ火

ゆきやうの世しき一鉢の水もあうゆりよく水は復たぬ火

ゆきやうの世しき一鉢の水もあうゆりよく水は復たぬ火

ゆきやうの世しき一鉢の水もあうゆりよく水は復たぬ火

ゆきやうの世しき一鉢の水もあうゆりよく水は復たぬ火

恋

天初三年因震當座御會初戀

けりて例を袖に心づかへにけり
 意を注ぎて

おひさ

日暮るゝもあそびにふりて急なうへまにめりて路も
あそびのあそびにふりて急なうへまにめりて路も

元祿八年田裏聖廟御法樂寄天慈

人志物なりけり心行くに山なりてその月日なり

寬文九年同月吹忌

少子孫人ふとねこまはく
海をふりて行く

にち
わ

ちやうどついに水も、あつたを恨むるぢやうな、わが身に
 する所井もあつたを、んに、いにも、わが身、わが身、わが身

延寶六年丁酉震月凶忍淚寫

あゝそんないふはともぞに。ふれ袖なみの

お
ひ
な
ひ

ちもねらねらとあねとばりよねとくもくもくあねたねと
 ちもねとあねとやねとあねとあねとあねとあねとあねと

元祿七年仙洞當座寄枕息

ちちもよくわらうはあの子も
わらうわらう

忍久矣

ぢ油のおりやうにはあもつね人はわさるをれ
そりゝそもふしゆかてむんけだのうちにありとあいに

寄鄧愈

人志はもと入野の土に生じしは其縁來に、

寬文八年後西泠月吹秋忍忍

水のいこ人ややろみろくは輝乃露那かとは油のちんも

寄瀧

[illegible]

[illegible]

天初三年塢西院月不逢戀

知
行
錄

寄心

寄橋志

元祿十二年巳酉鴨社御法樂寄柳庵

不逢惡

世乃ちやうど年月乃たゞなりや物なりき

寄弓志

寬文八年癸丑月次忌不逢忌

鍾年急

宣統十二年田家苗座一夏悉

天和二年回當座夢見

延寶四年 聖廟 卽法樂寢監人

晝息

あけぬる風の霞よりこぼれ袖もむらさきもわかれはるかな

夕息

あけぬる霞よりこぼれ袖もむらさきもわかれはるかな

寄江表

難波に乃多ね流るる人もあはれなれば後を思ひ寄る人も
寛文二年八月廿日寄江表

延寶四年田家月次同公作

寛文十年同月次寄江表

延寶二年同寄車馬

寄柳

あけぬる霞よりこぼれ袖もむらさきもわかれはるかな

元禄九年田家當座馴

あけぬる霞よりこぼれ袖もむらさきもわかれはるかな

貞享二年同寄日暮

あけぬる霞よりこぼれ袖もむらさきもわかれはるかな

元禄十二年田家清水社御法樂見歌歌

明暦三年田家月次寄河表

延寶二年同當座名立懸

各々名立懸

天和三年田家月次寄埋

そそハ此世ありてハ其の名取河をらるゝあふ津もははにふれ

元禄七重一寄野意

あつゝもなうのむかひの島乃とそりりたにそりてくさう

延寶八年一寄野意

あそけともなうあゝいぬき行のそりりたにねいふさうと

寄渡意

そりりたにそりてくさうあつゝもなうのむかひの島乃とそりりたにそりてくさう

寛文十三年一聖廟御法樂寄野意

そりりたにそりてくさうあつゝもなうのむかひの島乃とそりりたにそりてくさう

負宮二年田裏當座春賀意

あつゝもなうのむかひの島乃とそりりたにそりてくさう

寛文九年一聖廟御法樂寄野意

あつゝもなうのむかひの島乃とそりりたにそりてくさう

負宮二年一聖廟御法樂寄野意

あつゝもなうのむかひの島乃とそりりたにそりてくさう

寛文五年一聖廟御法樂寄野意

あつゝもなうのむかひの島乃とそりりたにそりてくさう

寛文五年一聖廟御法樂寄野意

明暦四年田裏當座寄野意

負宮二年一寄野意

あつゝもなうのむかひの島乃とそりりたにそりてくさう

寛文九年一聖廟御法樂寄野意

あつゝもなうのむかひの島乃とそりりたにそりてくさう

負宮二年一聖廟御法樂寄野意

あつゝもなうのむかひの島乃とそりりたにそりてくさう

寛文五年一聖廟御法樂寄野意

あつゝもなうのむかひの島乃とそりりたにそりてくさう

寛文五年一聖廟御法樂寄野意

けしき乃時門いふかきしものよきなるは病乃ちありと云ふ

傷愈

かきあかしくなるにあらはれし病のきりきりする

天和三年丁酉家當座共傷愈

いれしものあかきなりいれしものにあらはれし病のきりきりする

患侍愈

あけなきの乃ち乃ちの門よりはきりきりする

侍愈

きりきりするにあらはれし病のきりきりする

元禄十年仙洞春愈

油をけりきりするにあらはれし病のきりきりする

夕侍愈

かきあかしくなるにあらはれし病のきりきりする

寄月愈

ふきあかしくなるにあらはれし病のきりきりする

天和四年九月十二夜内裏御會帳より月乃ち

かりきりするにあらはれし病のきりきりする

つらき寄月愈

臨期よりかきあかしくなるにあらはれし病のきりきりする

同三年後西院月次侍久愈

きりきりするにあらはれし病のきりきりする

いふ川きりきり

今いふ病のきりきりするにあらはれし病のきりきりする

患而

かきあかしくなるにあらはれし病のきりきりする

万治三年丁酉聖廟御法樂寄月愈

きりきりするにあらはれし病のきりきりする

おきりきり

かきあかしくなるにあらはれし病のきりきりする

いふ病のきりきりするにあらはれし病のきりきりする

寄風亭

世にもうゝやうに御座るやうにうをばねはよき事な
にほのむやうにうをばねはよき事な

寄枕魚

来ふをわはわうとちりぐり母といふたけをりあふけ
 寄念表

寄衾志

乃天也。夏ハ山ニシテ平河人ニ云コトヲ言フ。乃知是重ハ
元祿十二年中仙洞當座寄種也。

人いひけりてはるる秘屋乃らにいく波の秘乃と病の字ん
同七年九月因震月吹盡息

貞享二年丁酉當座達並夕意

まふ人乃母好々と夏明うううわいのあふらるもそあふし
お明わあ

著るはゆるし何乃ち由ある人むるかある所々乃き

子象心

心にも何の事もなく、
春霞もあふ

[illegible]

ねとろふはむらさきとてふれり
 神心今も如く
 峯恋

神子てあふうりいさほろそそをけしうぐらこきわさくもあらねのた
 うりうめとれねんるのた母乙とぞ原なりやゆゑ

思達意
そとせむけよりけりなりせむけなりとのこふも枝

あいにそいふは所何ぞや
重利にふんじちて
御達也。

あはれうらふふといふは元も知れぬわがしづくは乃に
稀逢る

This image shows a vertical strip of a document page. On the left side, there is a dark, textured vertical band, likely representing the binding or the edge of the paper. The rest of the strip is a lighter, off-white color, which appears to be the main body of the page. There is no legible text or other content visible in this narrow strip.

寄衣衣
寄衣衣

あゆみまゝに
あゆみまゝに

あゆみまゝに
あゆみまゝに

あゆみまゝに
あゆみまゝに

あゆみまゝに
あゆみまゝに

明暦三年丁酉田家當座寄書

あゆみまゝに
あゆみまゝに

同二年聖廟御法樂別

あゆみまゝに
あゆみまゝに

別

あゆみまゝに
あゆみまゝに

別

あゆみまゝに
あゆみまゝに

あゆみまゝに
あゆみまゝに

天初四年後
月吹隔河急

字乃曰集乃小舟水不其融之爲字一
字乃河彼

寬文七子。同隔海路。忽

意王也凡此多行
 滿海意

南海志

寛文十二年田家月卅非心離念

寬文十二年田裏月吹非心離急

中より
 天和二年同御會寄達
 文

天和二年丁酉御會寄蓬齋

名實がいりふあり乃ち其の如くなり
寄雲心

寄雲心

あふやうのちもわきある類かりは神ゆゑとてわ
きりいあらまをばけつたてあやうな烟乃身けまうそ

かき

片思

寄秋風急

延寶八年丁酉震月吹忘忽

延寶八年丁酉震月以忘忽

ほとろく神もあつたにたふさ草もあつたそのもあつた
 あつたやうに人の世にもあつたつたに神もあつたね

ちり

被忘る

心志未定

何れに申入るも、いふにもあらず。なほ、
延寶三年の裏當座

延寶三年丙寅當座

寄水急

寄冰心

負享三年。内侍御に樂當座。社身急

負享云并日侍衛法學臺座不與

うらいてゝうゝをきふ身の終乃しかなるをいふは常世の事
天和三年儀同三司を秋帳に

秘の思も月もさるる乃を心して油を枯らさるはなり

恨
るもさるるを恨むといふはさるるを恨むといふも人いふはなり

恨
るはさるるを恨むといふはさるるを恨むといふも人いふはなり

寛文九年丁酉家重廟御法樂寄呈
志丹を心かたりしはさるるを恨むといふはさるるを恨むといふも人いふはなり

貞享二年同當座恨心中
今もさるるを恨むといふはさるるを恨むといふも人いふはなり

人傳恨
かゝるるを恨むといふはさるるを恨むといふも人いふはなり

寄問
人いふはなり

恨
かゝるるを恨むといふはさるるを恨むといふも人いふはなり

恨
かゝるるを恨むといふはさるるを恨むといふも人いふはなり

恨
かゝるるを恨むといふはさるるを恨むといふも人いふはなり

恨
かゝるるを恨むといふはさるるを恨むといふも人いふはなり

恨
かゝるるを恨むといふはさるるを恨むといふも人いふはなり

恨
かゝるるを恨むといふはさるるを恨むといふも人いふはなり

恨
かゝるるを恨むといふはさるるを恨むといふも人いふはなり

恨
かゝるるを恨むといふはさるるを恨むといふも人いふはなり

恨
かゝるるを恨むといふはさるるを恨むといふも人いふはなり

おとどけいしやうにきひくはたのふねをくせくはたわめ。

おとどけいしやうにきひくはたのふねをくせくはたわめ。
おとどけいしやうにきひくはたのふねをくせくはたわめ。
おとどけいしやうにきひくはたのふねをくせくはたわめ。
おとどけいしやうにきひくはたのふねをくせくはたわめ。
おとどけいしやうにきひくはたのふねをくせくはたわめ。
おとどけいしやうにきひくはたのふねをくせくはたわめ。
おとどけいしやうにきひくはたのふねをくせくはたわめ。
おとどけいしやうにきひくはたのふねをくせくはたわめ。
おとどけいしやうにきひくはたのふねをくせくはたわめ。
おとどけいしやうにきひくはたのふねをくせくはたわめ。

雜

寛文十二年四月内裏月次天象

内裏月次天象のありとほりれをわたりしにては月日の

延寶二年四月内裏月次

延寶二年四月内裏月次のありとほりれをわたりしにては月日の

寛文十二年四月内裏月次

寛文十二年四月内裏月次のありとほりれをわたりしにては月日の

元禄十二年四月内裏月次

元禄十二年四月内裏月次のありとほりれをわたりしにては月日の

同書御書始遠心如畫圖

同書御書始遠心如畫圖のありとほりれをわたりしにては月日の

延寶二年四月内裏月次

延寶二年四月内裏月次のありとほりれをわたりしにては月日の

山中龍水

松乃知の歌

浪の勢の中をのりてあまのつとむるやいづこに河の原より

寛文九年 後西院月夜塩屋煙

くらぐらも川をさうりてまゝに流るる水いづこもあふみ流るる

古寺鐘

いづこに流るる水いづこに流るる水いづこに流るる水いづこに流るる水

天和四年 田家水戸御法樂

初瀬の心もいづこに流るる水いづこに流るる水いづこに流るる水

元禄十一年 田家月夜

あふみ流るる水いづこに流るる水いづこに流るる水いづこに流るる水

夕鐘

あふみ流るる水いづこに流るる水いづこに流るる水いづこに流るる水

鐘聲 何方

あふみ流るる水いづこに流るる水いづこに流るる水いづこに流るる水

山家

あふみ流るる水いづこに流るる水いづこに流るる水いづこに流るる水

山家

あふみ流るる水いづこに流るる水いづこに流るる水いづこに流るる水

山家

あふみ流るる水いづこに流るる水いづこに流るる水いづこに流るる水

山家

あふみ流るる水いづこに流るる水いづこに流るる水いづこに流るる水

天和三年 田家當座山家

あふみ流るる水いづこに流るる水いづこに流るる水いづこに流るる水

山家入稀

いなりとてつふ人あはにんくわらふもくわらふもあはにんく

寛文五丁丁後西院當座

ゆくらをわらふるいふ後をも世のわらふるいふるいふるわらふ

元禄七丁丁田家月次山家客集

あまのりわ又いふ人いふにわらふいふるいふるいふるいふる

山家林枕

いふねいふねわらふるいふるいふるいふるいふるいふるいふる

林山家

帰れぬわらふるいふるいふるいふるいふるいふるいふるいふる

山家燈

えねる店にわらふるいふるいふるいふるいふるいふるいふる

元禄九丁丁田家水鏡宮御法樂山館西

はつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

同十三年仙回が茂林法樂和わらふ

のせきせき神わらふるいふるいふるいふるいふるいふるいふる

貞享三丁丁田侍和御法樂田家

まゐいはいはいはいはいはいはいはいはいはいはいはいはい

元禄十二年田家當座田里

そらけりか小田乃りわらふるいふるいふるいふるいふるいふる

閑居本

あはにんくわらふるいふるいふるいふるいふるいふるいふる

閑居燈

あまのりわ又いふ人いふにわらふいふるいふるいふるいふる

閑中燈

あまのりわ又いふ人いふにわらふいふるいふるいふるいふる

兩夜燈

夢山つと月いささかおとろけなまにか光を交さしつゝなりい
曉残燈、

曉殘燈

寛文十年内裏月作書

寬文十年丙寅月作書

まゐるにせしむ 縄乃木橋の母をいふやうに致のこゝろん

天和三年同聖廟御法樂等

天を尊とて地を卑とて人君を尊とて人臣を卑とて
 尊卑の別を明かにして上下の義を定むるは
 天子の務なり

あり人眼色とまじりて名残つを命取望ちに

より人の事あり乃月々今如く新しきことなりけり南無妙法
蓮華經院修學寺離宮八景の奇きことなり申に

隣雲夜雨

さいふく雲乃いかりはるのぬきましりあううおはにまゐのふ
 寛文五帝かや院十平圖の命人へにふるきりよ

牧牛圖

玉江りぢふ^{やまゑ}い^いの^の所^とを^をき^きり^りと^とぬ^ぬぎ^ぎを^を夢^{ゆめ}へ^へよ^よき^きけ^けり^りと^とも
同^{どう}二^にや^やり^りお^おり^りく^く下^{した}と^とも^も富^ふ士^しに^に逢^あふ^ふ

同二亭より下る富士に發す

ちるるありとわらるるゆゆのふとふとの新をそみらるる
 おろし 鈴子 蘇子 死あり

如
子
琴
子
林
鳳
記

あつちをいぢりてうけよけし目もとまゝ音流りぬ
氏茂野どりみゑにむら田古姓はく流るるまゝ

氏茂野よりみゑより笛古姓より清なるを

心付く野ちう進外露よりわづらひし雷のゆゑ

糸橋のゑ

かきめくもつむじむ乃とけくさうあうにゆふやゆんをい
蝶乃居よ

蝶乃蝶子

半ありしを
 近江八景の中
 秋月の鏡

近江八景中石山秋月の繪

ふもる東もあつてわしも常盤やうな所へくるとは此のうら月
竹上様の鈴なり

竹下櫓の銘

残月越開

と清くわくしきるくもし月乃たけ。袖をるあゝあゝの開

貞亨二年。田侍所御法樂野宿。

一候ふゆ。くもるのりは。夜をくもる。袖をるあゝあゝの開

旅

は。なれ。あゝあゝのり。は。夜をくもる。袖をるあゝあゝの開

貞亨二年。田侍所御法樂野宿。秋旅

萬のふも。あゝあゝのり。は。夜をくもる。袖をるあゝあゝの開

旅行

あゝあゝのり。は。夜をくもる。袖をるあゝあゝの開

貞亨二年。田侍所御法樂野宿。朝雲出馬鞍

あゝあゝのり。は。夜をくもる。袖をるあゝあゝの開

旅行。夕夜

あゝあゝのり。は。夜をくもる。袖をるあゝあゝの開

寄月旅行

あゝあゝのり。は。夜をくもる。袖をるあゝあゝの開

秋旅

あゝあゝのり。は。夜をくもる。袖をるあゝあゝの開

月前旅

あゝあゝのり。は。夜をくもる。袖をるあゝあゝの開

貞亨二年。田侍所御法樂野宿。

あゝあゝのり。は。夜をくもる。袖をるあゝあゝの開

野旅

あゝあゝのり。は。夜をくもる。袖をるあゝあゝの開

旅宿

あゝあゝのり。は。夜をくもる。袖をるあゝあゝの開

月前旅宿

あゝあゝのり。は。夜をくもる。袖をるあゝあゝの開

延寶四年。田侍所御法樂野宿。

あつたものゆゑあつた凡のうらもさうな舟出かたりも

天和二年一徳西院月次朝海路

しなせしうらもさうにけは舟さきなる里の松ぼろは

きんひのうらもさうに舟さきなる里の松ぼろは

寛文八年開東下向乃けは舟さきなる里の松ぼろは

いつのそ

きんひのうらもさうにけは舟さきなる里の松ぼろは

富士とら

あつたものゆゑあつた凡のうらもさうな舟出かたりも

天和二年一徳西院月次朝海路

しなせしうらもさうにけは舟さきなる里の松ぼろは

きんひのうらもさうにけは舟さきなる里の松ぼろは

寛文八年開東下向乃けは舟さきなる里の松ぼろは

二位よつとら

あつたものゆゑあつた凡のうらもさうな舟出かたりも

徳西院月次朝海路

あつたものゆゑあつた凡のうらもさうな舟出かたりも

天和二年

あつたものゆゑあつた凡のうらもさうな舟出かたりも

徳西院月次朝海路

あつたものゆゑあつた凡のうらもさうな舟出かたりも

述懐

あつたものゆゑあつた凡のうらもさうな舟出かたりも

あつたものゆゑあつた凡のうらもさうな舟出かたりも

あつたものゆゑあつた凡のうらもさうな舟出かたりも

あつたものゆゑあつた凡のうらもさうな舟出かたりも

あつたものゆゑあつた凡のうらもさうな舟出かたりも

あつたものゆゑあつた凡のうらもさうな舟出かたりも

あつたものゆゑあつた凡のうらもさうな舟出かたりも

若一町浦

あつたものゆゑあつた凡のうらもさうな舟出かたりも

あつたものゆゑあつた凡のうらもさうな舟出かたりも

あり人の四十が八松為久友

あまのうきもさるに松屋中世評ありやうきをなほりぬ
元禄七年最田大信宗修公七十が八松定齡友田
たりやゆありやうき

世の解け松やうきなるを松屋中世評ありやうきをなほりぬ
天和九年市田裏會如松有佳色諒圖後

うなれむけうきの中なりとるうきをなほりぬ
天和三年市田裏會如椿葉久録二月九日有

春うきをなほりぬとるうきをなほりぬ
元禄十三年同椿葉春久

うきをなほりぬとるうきをなほりぬ
明暦九年市田裏會如竹有佳色

うきをなほりぬとるうきをなほりぬ
元禄十三年同椿葉春久

うきをなほりぬとるうきをなほりぬ
明暦九年市田裏會如竹有佳色

うきをなほりぬとるうきをなほりぬ
元禄十三年同椿葉春久

うきをなほりぬとるうきをなほりぬ
明暦九年市田裏會如竹有佳色

うきをなほりぬとるうきをなほりぬ
元禄十三年同椿葉春久

うきをなほりぬとるうきをなほりぬ
明暦九年市田裏會如竹有佳色

うきをなほりぬとるうきをなほりぬ
元禄十三年同椿葉春久

うきをなほりぬとるうきをなほりぬ
明暦九年市田裏會如竹有佳色

うきをなほりぬとるうきをなほりぬ
元禄十三年同椿葉春久

うきをなほりぬとるうきをなほりぬ
明暦九年市田裏會如竹有佳色

うきをなほりぬとるうきをなほりぬ
元禄十三年同椿葉春久

うきをなほりぬとるうきをなほりぬ
明暦九年市田裏會如竹有佳色

うきをなほりぬとるうきをなほりぬ
元禄十三年同椿葉春久

